

言語表現教育の理論と実践のために

関西学院大学総合政策学部 准教授 牲川 波都季

私の現在の専門領域は、言語表現教育と言語ナショナリズムです。博士の学位は、日本語を第2言語とする人を対象とした「日本語教育学」で授与されたのですが、自分の中で、日本語を第1言語・母語として学ぶのか、第2言語として学ぶのかはあまり区別していません。学習する言語が日本語か他の言語であるかという違いも本質的な問題ではないと考えています。専門領域を日本語教育・日本語ナショナリズムとしていないのはそのためです。また、言語教育ではなく言語表現教育としているのは、言語教育という規範的な言語を効率よく習得できるようスキルを教えること、という印象がもたれやすいからです。そうではなく、ことばで表現すること、それを学び教えることの意味とはなんだろうという、スキル以前を問題にしたいという思いから、自分の専門を言語表現教育と呼んでいます。

このように考えるようになった背景には、新しい言語表現教育の実践を間近で観察し、ことばを通して学び手の興味関心がどんどん明確化されていくプロセスを知ったこと（『わたしを語ることばを求めて―表現することへの希望』、細川英雄との共著）、また、過去の日本語教育学の言説を分析することで、言語規範の効率的学びを追究する教育がナショナリズムと結びつきやすく、学び手の表現しようとする意欲を奪ってきたという問題意識をもったこと（『戦後日本語教育学とナショナリズム―「思考様式言説」に見る包摂と差異化の論理』）があります。

近年、教育課程ではグローバル人材育成が叫ばれ、小学校中学年からの英語教育導入さえ現実味を帯びてきました。その重点は、英語で意思疎通ができること、すなわち会話と聴解能力にあります。同時にグローバル人材育成に関する公的文書では、目的として日本の経済的勝利があからさまに言われ、その実現のため、英語教育のほか、日本人としてのアイデンティティの教育が強調されています。英語で意思疎通ができグローバルに活躍する、しかし日本人としての自覚は忘れず日本に富をもたらすことが期待されていると言えます。英語で話し聞く能力を高めるという、極めて実践的なスキルの上達がめざされているようで、それはグローバル化と矛盾する（またはグローバル化を支える）ナショナルなイデオロギーに直結しています。

私自身はこれまで教育歴として、留学生の日本語教育や留学生・日本人学生合同の多文化コミュニケーション教育、日本人の成人のための言語表現教育などを行ってきました。この教育経験も生かしつつ、本学部で特に携わるであろう留学生教育においては、言語の規範性を効率的・実践的に学ぶのとは一味違うゴールをめざしてみたいと考えています。現在の研究関心は、秋田県のグリーン・ツーリズム農家のもつ、異質性受け入れの思想です。当地の農家は外国語能力がそれほど高くないにもかかわらず、外国人を違和感なく迎え入れ、さらには互恵的な関係を築いてきました。一地域に住まってきた人々こそが、一国のナショナリズムをこえる新しい言語表現教育の目標を示唆してくれるのではないかと。その期待を胸に、しばらくは前任地であった秋田を訪れ続けたいと思います。